
掲示板競作企画パイルバンカー『仮面ライダーステーク』

切子Q B イ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掲示板競作企画パイルバンカー『仮面ライダーステーク』

【Nコード】

N4738U

【作者名】

切子QBI

【あらすじ】

某掲示板某マイナースレ競作企画
テーマ「パイルバンカー」
絶賛晒し中

（前書き）

いつだったか、後書きで続きは無いと書きましたが、

アレは嘘だ

燃え盛る炎、舐め尽くす熱。散華した瓦礫の中で俺は目覚めた。爆発のせいで、ビルの一室の窓ガラスは全て割れ、夜の街の明かりが陽炎を纏い揺れている。

——ここは……ぐっ！

両足に走る電撃のような激痛、朱にまみれた、辛うじてまだ脚の形を残す二本の肉が俺の下半身にくっついていていた。

——これじゃ、もう空手は無理か……

うすらぼんやりとそんな事を考える。冷静に考えれば脚どころか、命さえわからないのだが。

「飛田！ 生きているか！」

声と共に俺を担ぎ上げる人影、メガネをかけた痩身の男。

「小木……か？」

朦朧とする意識の中、俺は十年來の親友であり、優秀な科学者でもある男、小木の名を呟く。

「しっかりしろ！ こんな所で死なれちゃ困るんだ。お前、にはこのマスクドライダープラン一号機を着けて……もらわなくちゃ……」

ならないんだから……な」

小木の片手には小さな銀のアツシユケースがあつた。それを掴む小木の手が血に濡れている。やがてゆつくりと指から力が抜けていった。

「ああ、わかつてるぜ。約束だからな……おい！ 小木！」

小木の横腹に血のシミが大きく広がっていく。明らかな銃創だ。

「……へっ、どうつてこたあない。それより早く逃げ……」

黒い一団が俺と小木に立ちふさがる。装甲服とガスマスクを付けた、小銃の牙を持つ死の獵犬共だ。

——こいつらっ！

「飛田、お前は逃げる！」

アタツシユケースを握らせ、小木が俺を窓から投げ放つ。

「小木イイツ！」

「生きる飛田アツ！　そしてお前が、お前がステーキになるんだあッ！」

ビルから落ち行く俺が聞いた音は、友を貫く銃声。
俺が見た光景は舞い散る友の血霧。

そして俺が抱きしめた物は復讐のための牙。

二年後

関東地方都市、〇市郊外

叩きつけるような足音が路地裏の壁を叩く。

それは逃げていた。生存本能のため、恐怖のため、ただ街の片隅を逃げ続けていた。

よたつきながらも、その跳躍のような移動は人の速度を越えている。

ゴミ箱を踏み砕き、生ゴミをぶちまける。邪魔なスナックの古看板を真つ二つに切断、払いのけた。

恥も外分も——隠密性も機密性もない、全てをかなぐり捨てた逃走。それほどまでにそれは焦っていた。

「——おい、待てよ」

雑居ビルの間、突如現れた前方の人影にその足が止まる。

「ずいぶん怯えてんなあ……化け物の分際で人間らしくよお」

蒸し暑い夜に似合う、Ｔシャツとジーパンのラフな格好の青年――

――飛田 直人――は冷酷な、獰猛な笑いを浮かべた。

ビル街のネオンに、その姿が照らされる。

二メートルを超える背丈と細長いシルエツト。逆正三角形の頭部。鎌状に延びる、高周波振動を利用した切断能力を持つ両腕。重金属

を含むエメラルド色の生体装甲。

カマキリの擬人化の失敗作としか表現出来ない外見。中途半端に人間に近い様が嫌悪感をより引き立てる。

「才前ハ……何ダ！？ ナゼ我ラ『クーゲルシュライバー』ヲ狙ウ！」

その声は辛うじて人の言葉を話した。

「『なぜ』か……？」

飛田の掲げられた右手には二十センチ程の筒状の物体。対物ライフルの弾丸のような物があつた。

「決まつてんだろ……『復讐』だ！」

ビルからの落下から目覚めた時、飛田の前に一人の男がいた。

「おやおや、もう目覚めましたか。お丈夫ですねえ」

ニヤニヤと全てを嘲笑うように、笑顔を浮かべるその男は小木の協力者の二荒と名乗った。

飛田の脚はすでにサイバネティクス手術により機械の義足が取り付けられている。マスクドライダー一号機のセッティングも飛田用に済ませてあるという。まるで悪魔の如き手の回し用。

「さて、お膳立てはすみしましたので、肝心のあなたはいかがなさいますか？」

イヤミのように皮肉気に二荒が問う。飛田は迷う事無く、――
――復讐を選んだ。

「出番だ、ビートル1ツ！ 貫くぜ！」

めくり上げたTシャツの下にベルトのバックルが覗く。電子的紋様で刻まれるレリーフは、抽象化されたカブトムシの姿。

勢いよく、手に持つ筒――チヂリウム起爆用小型パイルバンカー――を装着する。

カチリという小さな響きの後に、巨大な破裂音が唸る。濃縮チヂリウムの活性化した青い燐光が飛田を包み込む。

『チヂリウムエナジー制御、装甲展開開始』

ビートル1の音声――精神疲労を和らげやすいとされる柔らかな女性の声――が告げる。

光に包まれた飛田、その身が装甲に覆われていく。

光が晴れたその中に立っていた者は、
黒い装甲に、血脈の様に引かれる赤のライン。
額には、甲虫を想起させる小型の角。
複眼状の正六角型パターンの入ったゴーグル。

夜の街に、復讐の魔人が現れる。

「キイヤッ！！」

咆哮を上げ、カマキリの怪人が両手を振るう。空中を不可視の斬撃波が疾駆する。

「セイツッ！」

それよりも速く、魔人は地を蹴る。斬撃波は魔人のいた背後の壁を切り裂くだけだ。

「ビートル1、ファイナルドライブセット、レディ！」

『チャージはもうやっている！ カウント、ワン！』

路地裏の狭い夜空に魔人が高く舞う。鈍く輝く三日月を背に、カマキリ目掛け落下。ベルトから左膝へ、青白い光が血液のように集っていく。

「気が効くなお前は！」

『集中しろ飛田、ツー！』

神の鉄槌の如く、左膝頭がカマキリの頭部に叩きつけられた刹那、

『スリー！ イグニッション！』

「ファイナルステークツッ！！」

左膝が爆発音と共に眩い光を放つ。膝頭内部から、義足の膝部の内部骨格である金属支柱の槍——パイルバンカー——が撃ち出された。

魔人の持つ最強の牙は瞬く間にカマキリの頭部を貫き、吹き飛ばしていく。

その直後、カマキリ体内の証拠抹消機能——つまり自爆装置が起動した。

「けっ、毎度派手に吹っ飛びやがる」

『出なければ証拠抹消機能の意味が無い』

爆発の中、無傷の魔人が立ち尽くす。

「俺が『何か』か、冥土の土産に教えてやるよカマキリ野郎」

それは、貫く者。それは、復讐者。それは挑戦者。汝、その名は、

「仮面ライダー————ステーキだ」

飛田 直人とビートル1の戦いはここから始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4738u/>

掲示板競作企画パイルバンカー『仮面ライダーステーク』

2011年10月8日03時50分発行